

～教員おすすめ本～

No. 23

総合社会学部 環境・まちづくり系専攻
津島 光



『建築論』

森田慶一 著

【先生からのコメント】

ものをつくる、あるいはデザインする、を志すものには必読の古典的名著である。建築論を著者は「 思索と制作 」の両輪で成立するとし、下記のように規定している。

「建築論とは、「建築とは何か」という問いに答えるためのいろいろな形の議論をひっくるめて指すと了解することができるであろう。」

ここでいう「 建築とは何か 」は問いである。それは、ある時はよくいう建物であろうし、町・あるいは街、そして、都市、景観であるかもしれない。また、人でもある。

建築を物理的・事物的・現象的そして、超越的と規定し、それぞれを強さ・用・美・聖としつつ、決して限定的であってはいけない「建築」の全体性（ゲシュタルト）を見事に記述している。



『都市のイメージ』

ケヴィン・リンチ 著
丹下健三, 富田玲子 訳

【先生からのコメント】

建築から都市へ、そして環境へと考えを広げる際に、都市の概観のとらえ方と重要性について、私に非常に示唆的な指摘をした1冊である。最終的には、リンチは都市をイメージ・エレメント・パス・エッジ・ディストリクト・ノード・ランドマークと分析分類し、最後、エレメントの相互関係を指摘し、都市の形態の本質に変化という時間軸を加える必要を説く。過去・現在・未来の時間軸である。変わらぬ景色などはないと彼は言いたいのだろう。

「 都市をみること 」の無限の楽しさを認識させてくれる1冊である。

2018年9月28日
近畿大学中央図書館